
空虚な青年―虚空の鳥かごに映るのは―

文月 華観

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空虚な青年―虚空の鳥がごに映るのは―

【Nコード】

N0642U

【作者名】

文月 華観

【あらすじ】

突発的に書いてみました。連載するかどうかは定かです、推敲、誤字脱字の確認などは一切しておりません。速筆で思ったことを自然に書いてだけです、いい話かどうかあまり期待しないでください。

（前書き）

R15 指定にはしてませんが、そんなグロテスクではないと思います。

——彼女を殺した。

愛してるが故に、殺めてしまった。

彼女の魂は肉体から解き放たれ、空に舞って儚く消えてしまった。

——どこへ行くのかも、教えてくれない。

追いかけるための道はどこにあるのか——。

それでも青年はただひたすら進むのであった。

彼女に会う旅に。

*

光のしずくが、落ちてくる。

鳥かこの青年は見上げた。

「どうした」

肩に乗る、蝶が問い訪ねた。

「——何でもない」

青年は、夜に目立つ白いシャツにズボン、まるでどこかの学生のような服装をしていた。質素で、シンプルな容姿は誰の目に留まることはない。空気のような透明感の雰囲気を持っていた鳥かこの青年は蝶にこう言った。

「行こう」

時計台の真下で、青年は立ち上がる。

「——もちろんだ」

片手に持つのは何も入っていない空虚な鳥かご。

金色が少し剥がれている、古い鳥かごを持つ青年を蝶が追う。光の粉を放ちながら蝶は舞うように飛んでいく。

「俺はいつ、逢えるのか」

「なんだ青年、もう諦めるのかい？」

諦めたくはない、しかし何度進んでも、何度歩いても彼女には会えないのだ。

もう、この世界にはいないのか――。

彼女は、俺のことを――嫌ったのか。

「――諦めない、というわけじゃないけど」

「ならいいよ、青年。いつでもついていくからな」

「ありがとう」

素直に礼を言つと、青年は空虚な鳥かごを一瞥してから蝶が肩に乗ったのを確かめて歩を進めた。

闇夜に映るは、ほのかな輝きを放つ光の粒。そして、目立つのは満月――満月は満ち欠けすることない、ただの満月。白くてやけに不気味な月光を浴びながら、地面は反射する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0642u/>

空虚な青年－虚空の鳥かごに映るのは－

2011年10月9日02時52分発行